落ちないマスカラより、1分の内緒話

奨励	髙橋 梨紗〔たかはし・りさ〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

（ローマの信徒への手紙　12章9―21節）

自分に訪れた突然の変化

今日はまず、このチャペル・アワーの場に立てることを心から感謝いたします。私は神学研究科の２年生になりました、髙橋梨紗ともうします。もう一つ自己紹介を付け加えるとしたら、私は今妊娠８カ月の妊婦です。予定では７月末に息子が誕生します。私のことをよくご存知の方は連れ合いのこともよく知っておられると思いますが、今は本当に多くの方にお支えいただきながら学生生活を送っています。今回の妊娠は私にとって喜びであると同時に、心底自分の人間性や信仰生活を問われる出来事であり、今まで経験したことのない感情を味わうきっかけとなりました。自分が今まで見えていなかったあまりにも多くのことに出会わせてもらったのです。まず、私は自分が妊娠していることが分かると、驚きや戸惑いというよりは意外と冷静にその事実を受け止めパートナーに伝えました。するとパートナーも冷静で一緒に産婦人科の門を叩き、エコーで３㎜になる小さな我が子を見て２人でハイタッチしたのが私のマタニティ生活の始まりです。私たち夫婦にとって新たな命の誕生は大変喜ばしいことだったのです。一面では２人で妊娠を喜べたことは恵みであり感謝すべきことです。けれども、私には容赦なく別の課題が押し寄せました。言葉にするにはあまりにも些細なことから、自らの将来に対する不安と自分は人の親になり得るのだろうかという戸惑い、それは自分の中のみで消化できる事柄だけでなく、周囲の人を巻き込む問題があまりにも多すぎました。

これまで私が経験してきた人生の節目というものは、学校への入学や試験であれ事前に準備をしたうえで取り組むことが可能でしたが、今回に至っていえばそれは通用しません。私にとって突然押し寄せたこの妊娠という出来事は、喜びであると同時に言葉にし難い不安と恐怖なのです。家族にどう思われるだろうか。学校はきちんと卒業できるのだろうか。自分は牧師になるための試験を受けられるのだろうか、教会の方はどう思うだろう。押し寄せる数々の不安に、正常な精神状態を保つのが難しいほどでした。

気持ちが落ち着かずに不安定だったころ、同じように突然の妊娠を経験した方々の声を聴く機会が与えられました。自分が妊娠をする以前から知っていた方々でしたが、何う体験や声は初めて耳にすることばかりでした。ある方は、自らが中絶した経験についてそのときのお気持ちや苦しみを語ってくださいました。またある方はご自身が流産したときの経験をお話しくださいました。なかには私よりも年下の方ですが、産む決意をなされた方もいます。彼女たちが語る言葉は、まさに背負ってこられた重みと深い思いを伴うものでありました。ご自身の身体に宿られた命と向き合い、そして傷ついたことのある方が自分の身の回りだけでも一人や二人ではないという事実に驚かされました。小さな命を惜しみ慈しんでおられる方の言葉は、私が私としてこの一つの命とどう向き合うのかを深く考えるものとなりました。さらに言えば、神様と自分との関係を問いなおすものだったのです。

自分の人生の舵を
とるのはだれ

自らのことだけでなく、すでに生きたもう一つの命にかかわることです。自分に今押し寄せている悩みや不安に押しつぶされ、何か本当に大切にすべきことを見失いはしないだろうか。クリスチャンである自分は誰を主として信じ、何を真理として生涯歩んでいこうと決めたのかを問わずにはいられません。福音書のなかで描かれるイエス様は、日々襲いかかってくる事柄に対して思い煩うことはやめなさいと言われます。私たちがこの世に生き続けるかぎり、不安や緊張に絶えず見舞われ心が自由になるということはないものです。この社会のなかで周囲の人と歩幅と歩調を合わせながら歩んでいかなければ、集団から孤立してしまうことや厄介者扱いされることの引き金となりえます。私たちは日々の生活や雑務に追われるなかで、本当にこのままでよいのかと疑問を抱き後ろめたさを抱えつつ、ときには情けない思いをしながら自らに襲いかかる出来事に対処し、最善であってほしい道を選択していきます。誰でもいくつか選択肢が並べられたときには、よりよいものを選択したいと思うものです。後々後悔しないように、誰かに相談をもちかけ、頭のなかで様々なパターンを思い浮かべながら物事を決断していきます。どこかで人は、自分の人生の支配権は自分がもっているような幻想から抜け出すことができずに存在しています。自分の生活を自分の思うままに取り仕切ろうとするうちに、生きていくうえでの主審はいつの間にか神様ではなく、自分にすり替わってしまうのです。誰もが自分のことは自分が一番よく知っていると思っています。けれども人は、自分を構成しているほんの一部しか知りません。そんななかで私は押し寄せる不安や恐怖を前にして、何か取るに足らないものを必死に守ろうとしていたのかもしれません。それは周囲からの批判や軽蔑の声を恐れていたのかもしれませんし、変化していく生活への恐れであったかもしれません。とにかく私は起こってもいない状況を想像し、勝手に自らを追い込んでいたように思います。自分で人生の舵を握ろうとしていたのです。その舵を握ろうとしている自分の命と子どもの命は、神様から与えられたものであるにもかかわらず。自分の命や人生が自分のものであり自分の手中にあると思っていては、日々押し寄せる不安に心を砕きつつ気持ちを乱しているわけですから、静かに黙想することや祈りを捧げることは自然と生活のうちから遠のいてしまいます。すると、丸裸の状態で人前に晒されているような不安感に絶えず自分を追い込み、出口のないトンネルに入っていくことになります。自らに襲いかかる「自分の生活を自らでコントロールしたいという欲求」を手放していくことは、神様が絶えず私たちに声をかけ、たぐり寄せてくださっていることに気がつくきっかけとなるのです。そしてもっているものを手放していく生き方は、普段私たちを縛っている虚栄心や名誉心から自由になることで、より自分らしい自分として、神様から愛される者として歩み出すこととなります。

今夕の説教題を「落ちないマスカラより、１分の内緒話」というものにいたしました。マスカラは目を大きく見せるために用いる化粧品です。実際の目の大きさよりも大きく見せるために使用するものです。より綺麗に見せるための手段として使うものですが、どんなにマスカラを重ねぬりしても実際の目の大きさが変わるわけではありません。身なりのことだけでなく偉そうに虚勢をはって生きてみても、莫大な財産を手にしていたとしても、それは精神的に自分を保つ要素にはなり得ますが、実際に生きる人間のうちにあるものを成長させてくれるわけではないのです。

キリストの愛を
いつも思うなら

私たちは世のなかからかけ離れて生きていくことはできませんが、同時に世俗的な世のなかにあっても聖書の御言葉に耳を傾けキリストの愛を実践する器として歩んでいきたいものです。私たちは大前提として神様に愛され、生かされている存在です。神様からの愛に生かされている私たちはその受けている愛を他者に反映していくことが求められます。そして、キリストの生き方を土台とする愛によっておのれを小さきものとして認め、人に仕えていくことに気づかされるものです。「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい」と聖書に記されていますが、誰よりも先立って人に仕える生き方をされたのは主イエスご自身であります。そして、この人に仕える生き方こそがクリスチャンの原点であり核となるものであるように、いつも神様の声に耳を傾けることへと繋がっていくのだと思います。

神の愛を実践する
器として、
祈りをもって生きること

世俗的な世にあっても神様の意志を問い続けながら歩んでいくためには祈りが重要な源となります。心静かに祈ることは自分の精神状態を落ち着かせ、今自分が思い悩んでいる事柄を明確に気づかせてくれます。

そして祈りによってなされる神様との会話は、心と信仰を成長させる手助けとなるのです。それが例え１分間であっても大切なことは何であるのかを知る大切な時間なのです。聖書は語りかけます。

「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」。

2012年5月15日　今出川火曜チャペル・アワー「音楽礼拝奨励」記録